原　著

生産年齢人口における勤労者入院患者の疾病と手術

神宮司誠也
独立行政法人労働者健康安全機構九州労災病院

（平成 28 年 4 月 18 日受付）

要旨：【目的】労働者健康安全機構では勤労者医療の一環として，15 歳以上の入院患者を対象とした病職歴調査を行ってきた．これまでの同データを用いた研究で，勤労者医療の需要が高いこと，さらに疾患群別割合や手術群別割合では特に生産者年齢人口世代における勤労者と無職者に若干の違いがあることが示された．今回，勤労者医療におけるターゲット絞り込みの一助となることを期待して，同世代の勤労者入院患者における，頻度の高い疾患や手術について，より詳細に調査した．【対象・方法】平成 17～24 年度における全労災病院における病職歴調査データから，生産年齢である 15～64 歳の勤労者入院患者（男性 171,722 名，女性 95,708 名）のデータを用いた．疾病分類は「疾病，障害および死因統計分類提要（ICD-10（2003 年版）準拠）」の大分類，手術分類は「ICD-9-CM 2003　手術および処置の分類」を用いた．【結果】男性上位疾患は「良性新生物」(5.1%)，「消化器の悪性新生物」(5.1%)，「その他の脊柱障害」(4.9%)，「膝及び下腿の損傷」(4.3%)，「虚血性心疾患」(3.9%)．上位手術は「大腸病変または組織の局所切除術または破壊」(6.7%)，「内固定を伴う骨折の観血的整復術」(6.4%)，「鼠径ヘルニアの一側修復術」(3.4%)，「椎間板の切除術または破壊術」(3.3%)，「前立腺および精嚢の診断的処置」(2.9%)．女性上位疾患は「良性新生物」(10.3%)，「女性生殖器の非炎症性障害」(3.6%)，「口腔，唾液腺及び顎の疾患」(3.5%)，「分娩」(3.3%)，「膝及び下腿の損傷」(3.3%)．上位手術は「腹式子宮全摘術」(5.9%)，「内固定を伴う骨折の観血的整復術」(4.0%)，「手術的抜歯術」(3.3%)，「胆嚢摘出術」(3.3%)，「子宮の病変または組織の切除術または破壊術」(3.0%)．【結論】性別や年代別で疾患や手術に偏りがあり，頻度の高い疾患や手術を同定することができた．

（日職災医誌，64：331―335，2016）

―キーワード―
勤労者医療，職場復帰

はじめに

人口高齢化に伴い，生産者年齢人口は減少しつつあり，社会を支える勤労者の健康を守ることは重要な課題のひとつとなっている．労働者健康安全機構では勤労者医療の一環として，15 歳以上の入院患者を対象とした病職歴調査を行ってきた．これまでの同データを用いた研究で[1)2)]，性別や年別に関係なく，勤労者入院患者の在院日数が無職者より短いことが明らかになった．年代別でも，特に生産者年齢人口世代の勤労者入院患者が早く退院していた．ほとんどが元の職場への復帰を希望しており，その 1/3 は復帰の時期や復帰後の体調に不安を持っていた．これらの結果は，速やかな退院後職場復帰や両立支援をめざす勤労者医療の需要が高いことを示している．さらに疾患群別割合や手術群別割合では特に生産者年齢人口世代における勤労者と無職者に若干の違いがあることも示された．

今回，勤労者医療におけるターゲット絞り込みの一助となることを期待して，生産者年齢人口世代に限って，勤労者入院患者における頻度の高い疾患や手術について，より詳細に調査した．

対象・方法

平成 17～24 年度における全労災病院病職歴調査データから，15～64 歳の勤労者入院患者のデータだけを用いた．男性 171,722 名，女性 95,708 名．内，手術症例は男性 107,125 名，女性 61,826 名であった．疾病分類は「疾病，障害および死因統計分類提要（ICD-10（2003 年版）準拠）」を用いて，中間分類項目（総数 2,154）別の上位 20 について調査した．男性における中間項目数は尿路生殖

表 1　上位 20 位までの疾患項目（大項目分類別にまとめたもの）

男性

項目番号	中間分類項目名	割合
D10	良性新生物	5.1%
C15	消化器の悪性新生物	5.1%
M50	その他の脊柱障害	4.9%
M45	脊椎障害	2.8%
S80	膝及び下腿の損傷	4.3%
S60	手首及び手の損傷	1.7%
S00	頭部損傷	1.5%
S40	肩及び上腕の損傷	1.5%
I20	虚血性心疾患	3.9%
I60	脳血管疾患	3.3%
I30	その他の型の心疾患	1.9%
J30	上気道のその他の疾患	3.4%
E10	糖尿病	3.3%
K80	胆のう＜嚢＞，胆管及び膵の障害	3.0%
K55	腸のその他の疾患	2.9%
K40	ヘルニア	2.4%
K00	口腔，唾液腺及び顎の疾患	2.0%
K20	食道，胃及び十二指腸の疾患	1.6%
N20	尿路結石症	2.4%
G40	挿間性及び発作性障害	1.6%

女性

項目番号	中間分類項目名	割合
D10	良性新生物	10.3%
C50	乳房の悪性新生物	2.9%
C15	消化器の悪性新生物	2.7%
C51	女性生殖器の悪性新生物	1.6%
N80	女性生殖器の非炎症性障害	3.6%
K00	口腔，唾液腺及び顎の疾患	3.5%
K80	胆のう＜嚢＞，胆管及び膵の障害	3.0%
K55	腸のその他の疾患	1.8%
O80	分娩	3.3%
O30	胎児及び羊膜腔に関連する母体ケア	3.2%
O60	分娩の合併症	2.9%
O00	流産に終わった妊娠	1.6%
S80	膝及び下腿の損傷	3.3%
M50	その他の脊柱障害	2.8%
M15	関節症	2.2%
M45	脊椎障害	1.2%
J30	上気道のその他の疾患	2.3%
I60	脳血管疾患	1.9%
E10	糖尿病	1.8%
H90	耳のその他の障害	1.2%

器系疾患の内，乳房の障害，女性骨盤臓器の炎症性疾患，女性生殖器の非炎症性疾患，さらに妊娠・分娩及び産褥，周産期に発生した病態を除く，1,981．女性では，尿路生殖器系疾患の男性生殖器を除く，2,142 となった．手術分類は「ICD-9-CM 2003　手術および処置の分類」を用い，章別（全 16 章）割合等を調べた．

結　果

男性上位 20 疾患項目で 58.5% を占めていた．上位疾患は「良性新生物」(5.1%)，「消化器の悪性新生物」(5.1%)，「その他の脊柱障害」(4.9%)，「膝及び下腿の損傷」(4.3%)，「虚血性心疾患」(3.9%)．上位 20 疾患を大項目分類で分けると（表 1），消化器系（11.9%），新生物（10.2%），循環器系（9.1%），外傷等（9.0%），筋骨格系（7.7%），呼吸器系（3.4%），内分泌等（3.3%），尿路生殖器系（2.4%），神経系（1.6%）であった．年代別では，呼吸器系や外傷等は，若い世代に多く，年齢が高いほど少なかった．消化器系や筋骨格系は年代に関係なく，ある一定割合含まれていた．一方，循環器系や新生物は年齢が高くなるほど多かった（図 1）．

男性手術章別割合では，筋骨格系（26.7%）と消化器系（25.8%）で約半分を占めていた．循環器系（8.3%），鼻，口及び咽頭（8.2%），男性生殖器（4.3%）や尿路系（3.1%）も多かった（図 2）．年代別では鼻，口及び咽頭や筋骨格系は若い世代に多く，年齢が高いほど少なかった．一方，循環器系や消化器系，男性生殖器，目は年齢が高いほど多かった（図 3）．全体の 3% 以上を占める手術は，大腸病変または組織の局所切除術または破壊(6.7%)，内固定を伴う骨折の観血的整復術(6.4%)，鼠径ヘルニアの一側修復術（3.4%），椎間板の切除術または破壊術（3.3%）であった（表 2）．

女性上位 20 疾患項目で 57.4% を占めていた．上位疾患は「良性新生物」(10.3%)，「女性生殖器の非炎症性障害」(3.6%)，「口腔，唾液腺及び顎の疾患」(3.5%)，「分娩」(3.3%)，「膝及び下腿の損傷」(3.3%)．上位 20 疾患を大項目分類で分けると（表 1），新生物（17.5%），妊娠等（11.0%），消化器系（8.3%），筋骨格系等（6.2%），尿路生殖器系（3.6%），外傷等（3.3%），呼吸器系等（2.3%），循環器系（1.9%），内分泌等（1.8%），耳等（1.2%）であった．年代別では，呼吸器系や消化器系は，若い世代に多く，年齢が高いほど少なかった．妊娠等は若い世代で多く占めていた．新生物は 35～54 歳に多かった．一方，循環器系や筋骨格系は年齢が高くなるほど多かった（図 1）．

女性手術章別割合では，女性生殖器（21.3%），筋骨格系(20.5%)，消化器系(14.5%)，鼻，口及び咽頭(8.4%)，表皮組織(7.9%)，産科的処置(7.1%)が多かった(図 2)．年代別では鼻，口及び咽頭，産科的処置や女性生殖器は若い世代が多かった．一方，循環器系や消化器系，目，表皮組織は年齢が高いほど多くなっていた．筋骨格系は若い世代も多かったが，高齢になっても多かった(図 3)．全体の 3% 以上を占める手術は，腹式子宮全摘術(5.9%)，内固定を伴う骨折の観血的整復術(4.0%)，手術的抜歯術(3.3%)，胆嚢摘出術(3.3%)，子宮の病変または組織の切

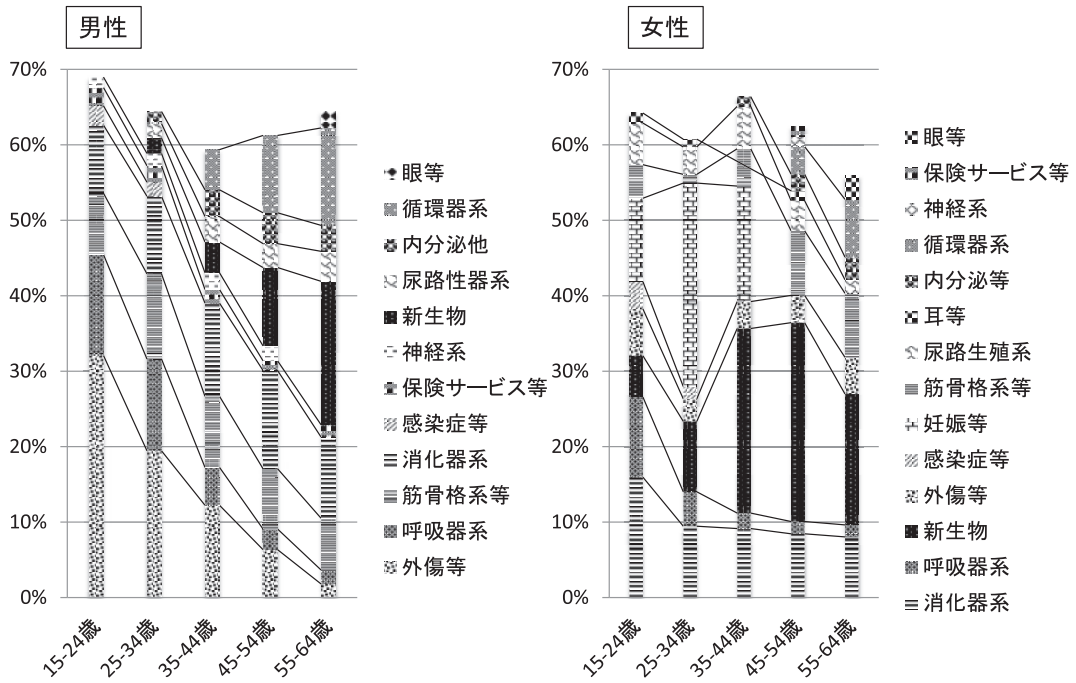

図 1　性別年代別上位 20 疾患項目別割合.

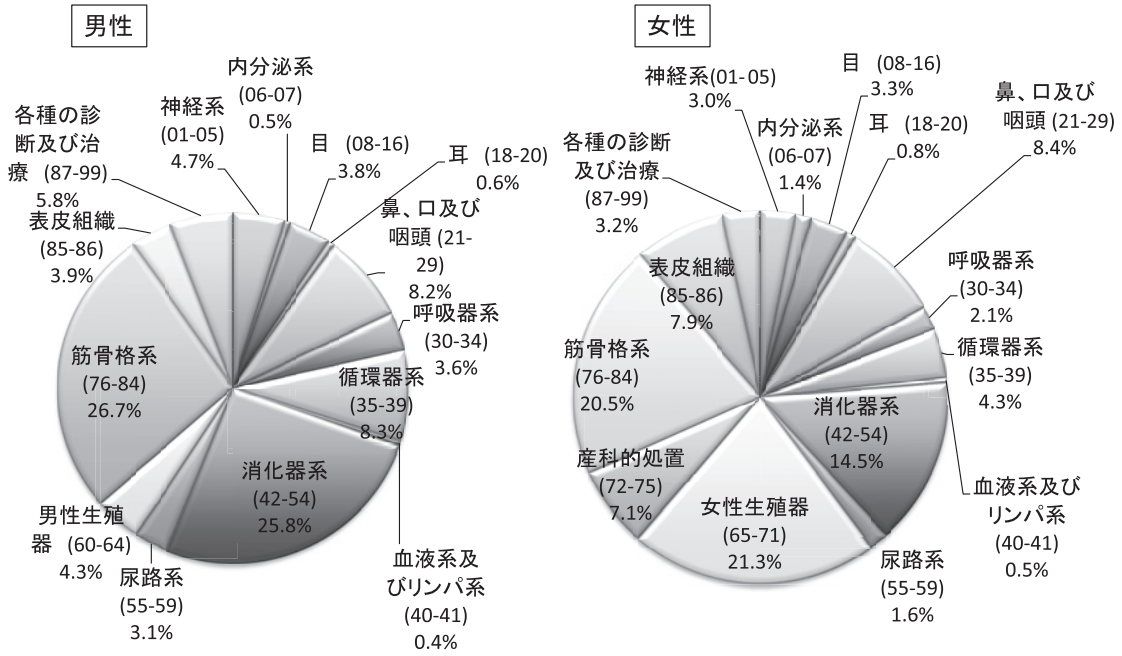

図 2　性別手術章別割合.

除術または破壊術（3.0%），下肢の関節置換術（3.0%）であった（表 2）.

考　　察

2,000 前後の疾患分類項目の中で，性別に関係なく，上位 20 項目が 6 割程度を占めており，疾患に偏りがあることが示された．また，性別年代別に頻度の高い疾患群が明らかとなった．手術においても性別，年代別に頻度の高い手術群が明らかになった．勤労者医療ターゲット絞り込みについては，良好な職場復帰ができていない疾患群あるいは手術群についての情報も必要である．頻度が高く，かつ職場復帰について問題が多いような疾患や手術が勤労者医療をもっとも必要としていることになる．さらなるターゲット絞り込みには，現在の病職歴調査とリンクする退院後職場復帰調査が求められる．

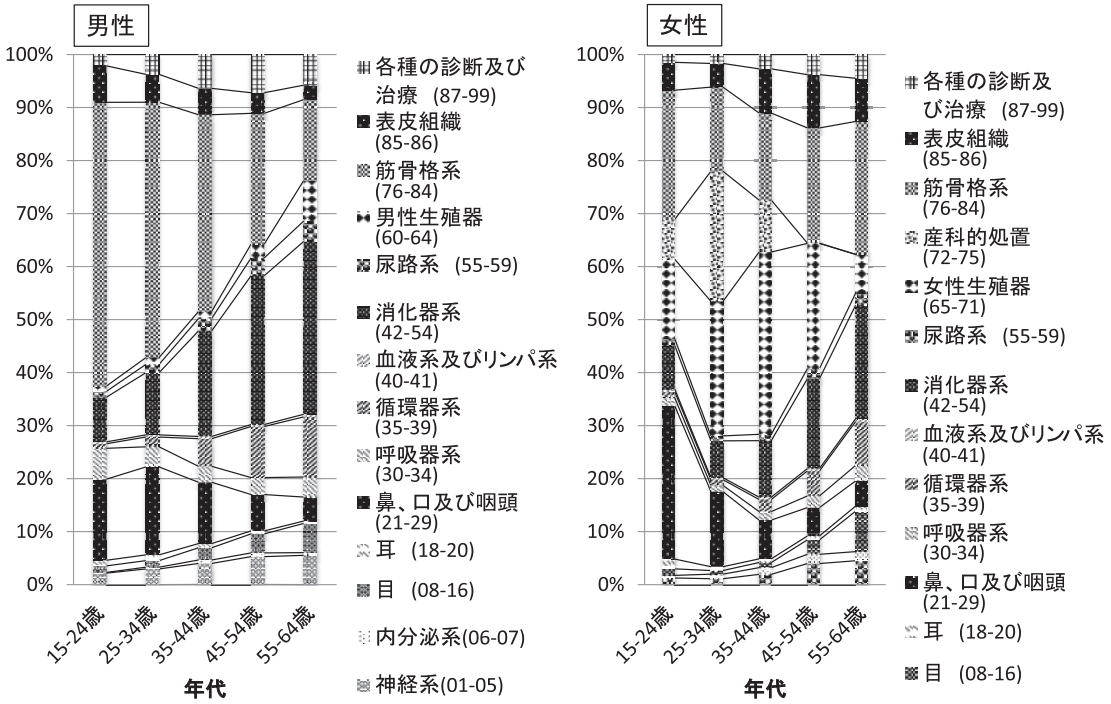

図 3　性別年代別手術章別割合.

表 2　上位 20 番目までの手術（章別にまとめたもの）

男性

手術分類名	割合
大腸病変または組織の局所切除術または破壊術	6.7%
鼠径ヘルニアの一側修復術	3.4%
胆嚢摘出術	2.7%
虫垂切除術	1.3%
内固定を伴う骨折の観血的整復術	6.4%
椎間板の切除術または破壊術	3.3%
骨へ埋め込まれた器具の除去術	1.9%
下肢の関節のその他の修復術	1.9%
膝関節半月軟骨の切除術	1.9%
筋，腱および筋膜の縫合術	1.5%
脊椎固定術	1.4%
脊柱管構造物の診査および減圧術	1.9%
前立腺および精嚢の診断的処置	2.9%
体外衝撃波砕石術［ESWL］	2.6%
冠動脈閉塞の解除およびステント挿入術	2.5%
心および心外膜の診断的処置	1.6%
人工眼内レンズ［偽水晶体］の挿入術	1.5%
手術的抜歯術	1.5%
アデノイド切除術を伴わない口蓋扁桃摘出術	1.4%
皮膚および皮下組織病変または組織のその他	1.3%

女性

手術分類名	割合
腹式子宮全摘術	5.9%
子宮の病変または組織の切除術または破壊術	3.0%
卵巣の病変または組織の局所切除術または破壊術	2.2%
子宮頸部円錐切除術	1.8%
子宮頸管拡張を伴う子宮内容除去術	1.8%
内固定を伴う骨折の観血的整復術	4.0%
下肢の関節置換術	3.0%
椎間板の切除術または破壊術	1.9%
下肢の関節のその他の修復術	1.7%
膝関節半月軟骨の切除術	1.7%
手術的抜歯術	3.3%
アデノイド切除術を伴わない口蓋扁桃摘出術	1.3%
胆嚢摘出術	3.3%
大腸病変または組織の局所切除術または破壊	2.4%
虫垂切除術	1.4%
乳房組織の切除術または破壊術	2.9%
乳房切除術	1.7%
皮膚および皮下組織病変または組織のその他	1.4%
その他の分娩時新鮮裂傷の修復術	2.0%
分類されないタイプの帝王切開術	1.6%

結　論

生産年齢人口における勤労者入院患者データを調べ，性別や年代別で疾患や手術に偏りがあり，頻度の高い疾患や手術を同定することができた.

利益相反：利益相反基準に該当無し

文　献

1）神宮司誠也：労働者健康福祉機構施設での病職歴調査データによる，勤労者入院患者の現状. 日本職業・災害医学会会誌　62（6）：388―392, 2014.
2）神宮司誠也：病職歴調査データによる勤労者入院患者の

現状―第２報―．日本職業・災害医学会会誌 63（6）：364―371, 2015.

別刷請求先 〒800-0296 北九州市小倉南区曽根北町 1―1
独立行政法人労働者健康安全機構九州労災病院
神宮司誠也

Reprint request:
Seiya Jingushi
Kyushu Rosai Hospital of the Japan Labor Health and Safety Organization, 1-1, Sonekita-machi, Kokura Minami-ku, Kitakyushu, 800-0296, Japan

Common Diseases and Surgeries among Hospitalized Workers of the Working-age Population

Seiya Jingushi
Kyushu Rosai Hospital of the Japan Labor Health and Safety Organization

Due to the current aging of society, the number of workers supporting our society is decreasing. Medical care for such workers should therefore be a matter of concern. We investigated the most common diseases and surgeries among hospitalized workers using the data collected in a survey of all 31 Rosai Hospitals. A total of 171,722 male and 95,708 female workers of working age (15–64 years old), who were hospitalized from 2005–2012, were examined. Their diseases and surgeries were classified according to the International Classification of Diseases, 10th and 9th revisions, respectively. The most frequently reported diseases among men were "Benign neoplasms" (5.1%), "Malignant neoplasms of digestive organs" (5.1%), "Other dorsopathies" (4.9%), "Injuries to the knee and lower leg" (4.3%), and "Ischemic heart disease" (3.9%). The most frequently reported surgeries among men were "Local excision or destruction of lesion or tissue of large intestine" (6.7%), "Open reduction of fracture with internal fixation" (6.4%), "Unilateral repair of inguinal hernia" (3.4%), "Excision or destruction of intervertebral disc" (3.3%), and "Diagnostic procedures on prostate and seminal vesicles" (2.9%). The most frequently reported diseases among women were "Benign neoplasms" (10.3%), "Noninflammatory disorders of female genital tract" (3.6%), "Diseases of oral cavity, salivary glands and jaws" (3.5%), "Delivery" (3.3%), and "Injuries to the knee and lower leg" (3.3%). The most frequently reported surgeries among women were "Total abdominal hysterectomy" (5.9%), "Open reduction of fracture with internal fixation" (4.0%), "Surgical removal of teeth" (3.3%), "Cholecystectomy" (3.3%), and "Excision or destruction of lesion or tissue of uterus" (3.0%). We herein identified common diseases and surgeries among hospitalized workers of the working-age population and found sex- and age-dependent differences.

(JJOMT, 64: 331―335, 2016)

―Key words―
hospitalized workers, return to work

©Japanese society of occupational medicine and traumatology http://www.jsomt.jp